



「
熱の再誕
」

大分県立大分豊府高等学校

亀山 星來

試合終了三十秒前。あたしに勢いよく回されたパスを必死に手へ迎え入れた。これが正真正銘のラストチャンス。これまで培った感覚を頼りに、相手チームの猛襲を掻い潜る。四方八方から無限に伸びてくる手を細かいステップで翻弄し、あたしより何倍も大きい選手の壁を高速ドリブルですり抜ける。熱くて肺が苦しくて死にそうだ。あたしの最高の武器のスタミナもとつくに息絶えていて、ぎゃあ、という女子もへつたくれもない叫びを上げたのが敵か味方かすらもわからない。だが、

あたしの今の体力と精神的にシュートが狙えるぎりぎりの位置。ほぼほぼ悪鬼の形相と化した相手チームからどうにか逃げ切ったあたしは、身体中の汗が飛び散るのを感じながらゴールへとボールを放った。

糸とも言えぬ程に細い勝利の目を手繰り寄せて掴んだ、最後の逆転の可能性。これが決まれば大逆転勝利。こっちの五人の全部を使い切ったシュートがゆつくりと放物線を描いていく。走馬灯の如くスローになる視界の中、ついにボールがバスケットゴールに触れた。ワールドの十人、審判、ベンチメンバー、観客。数え切れないほどの視線が、ゴールの上を周るボールの行方を見つめる。そして。

が
こ
ん。

ボールがゴールを一周半した所で、綱渡りの姿勢を崩したボールはゆっくりとゴールネットの中へ倒れ込んだ。瞬間、試合終了のホイッスルが高らかに鳴り響く。これで相手チームと一点差、あたしたちの勝ちだ！

「理奈、やったああ！」

「ちよ、今飛びつかれたら……うぎやつ」

ホイッスルから一拍遅れてきた大歓声に耳をやられながらもどうにか立っていると、チムメイトの子に勢いよく抱きつかれた。汗でぐちゃぐちゃになったポニーテールが、さらに崩れる。到底制汗スプレーなんかじゃ掻き消せない汗臭さが、つんと鼻に came。

「理奈、私たち、これでインターハイだ、私たちの夏、まだ続くんだよ！」

そう笑った子と目が合った瞬間、涙が溢れてきたのはきつと汗の匂いとタツクル並みのハグのせいだ。次々と集まる仲間達の笑顔を噛み締める様に見つめたあたしは、ようやくチムメイトを抱きしめ返した。

そう言えばあの時もココア買って試合に行つたつけ。夏だから流石にアイスだったけど、あたしはぼんやりと昔のことを思い出しながら、自販機から吐き出されたホットココアを手で覆つた。洗ひ物でひび割れた指に暖かさが染みる。真冬の寒さを舐めて手袋を持つてきて

いなかったものだから、ちょうどいい位置に自販機があってくれて助かった。それはそれとしていい加減にハンドクリーム買わないと、なんて頭のメモに書き留めながら、あたしは家へ歩き出した。

高校三年生の、県大会決勝の試合から二年。あの後あっさりと全国常連の強豪に負かされてから、あたしはバスケットとは全く関係の無い道へ進んでいた。どこにでもいる田舎の中堅私立大学の文系学部生。それが今のあたしの肩書きだ。インターハイ出場を決めた時は大学からスカウト受けて、いずれはプロに……なんて考えていたが、今となってはこの話は飲み会のお笑い草である。そりゃあそうだ、インターハイ初出場程度で大学からスカウトが来るんだったら、どの大学もスポーツ選手で満員に決まっている。人生、そんな甘くないのだ。あたしはココアを啜りながら、先程歩いてきた道を振り返った。もう十二月の半ばになる。大学生になって大人になってから、時間の流れが倍速になったかの様だ。吹き荒ぶ風にぶるりと震えながら、あたしは歩くスピードを上げた。今日みたいな日はさっさと帰って寝るのが一番だ。早く暖かい布団に潜り込もう。そう決意して、冷めかけているココアを勢いよく飲み干した。あ、ゴミ箱探さなきゃ。

辺りを見回すと、ちょうど近くに公園への細道があったのでそこへ入る。この公園は春の時に花見に来てからは立ち寄っていないが、ゴミ箱があったのは何となく覚えていた。ココアの空き缶だけ捨てたらすぐに帰ろう。道に増えてくる枯葉をさくさくと踏み締めながら、あたしは空を見つめてみた。連日、相変わらずの寒空だ。

しばらくして公園の広場に出ると、あたしが立てる枯葉のさくさくという軽快な音に混じり、とんとんという懐かしい音が聞こえてくる。ボール……しかもこの感じはバスケットボールのドリブルの音だ。めずらし。こんな超寒い日にバスケットをやっているなんて。

目当てのゴミ箱は見つかったが、この極寒日にバスケットをやっている変わり者を一目見たくなり、音の鳴る方へと足を向ける。さっきのココアの思い出も行動力に拍車をかけていた。前髪を容赦なく吹き飛ばす強風の中、公園のトイレをぐるっと周る。音的にも過去の記憶的にも、バスケットゴールがあるのはこの奥だ。

「へー。子どもは風の子って言うけど、元気だねえ」

そこに居たのは、髪を刈り上げたいかにもなスポーツ少年だった。よく目立つ青色のダウンに厚手のズボンを着き、集中した様子でドリブルを繰り返している。耳と頬を真っ赤にししながらボールを見つめるその姿に何だか懐かしくなりながら、私は懸命に練習する名もなき少年の背中を見つめる。

「あっ」

「おっと……はいこれ、ボール」

その時、一際強い風がボールの軌道を変えた。風の行くままに転がるボールを追いかけて、少年にパスする。あのままだとかかなり遠くまで行っただと思うから、あたしが近くにいて良

かった。水たまりとかに突っ込むと掃除面倒だもんなあ。

パスしたボールが少年の手にすっぽり収まったのを見届けて、あたしは今度こそ踵を返した。空を覆う雲はだんだんと黒く染まってきて、雪が降りそうな予感がする。ここから走ったら降るまでに帰れるだろうか。

「ありがとうございます！ お姉さん、バスケやってるんですか？ 綺麗なパスですね」

「あたしは昔やってただけだよ。それより、もうそろそろ雪が降りそうだから帰りな、君」
「だからあんなに慣れてる感じだったんだ。あ、僕はまだ大丈夫です！ 次の試合までに練習しなくちゃなんぞ」

こいつなかなか図太いな。元気いっぱいな笑みで練習続行を告げた彼の明るさに思わず怯んでしまう。大学生になってほぼ大学と家とバイト先を往復しているだけの暇人にはその笑顔は眩しすぎた。昔のあたしは、このくらい熱量をもってプレーしていたのかな。少年のドリブルをしぼし眺めながら、あたしは高校時代を思い返す。どうやら今日はあのココアのせいで、センチメンタルな気分らしい。だからだろうか。

「もうちょっと背を伸ばすといいよ。あんまり姿勢低くすると疲れやすいから」

口から無意識に、高校の後輩にしたときの様なアドバイスを溢れた。いや、この場合ただのおせっかいだからアドバイス未満だ。ドリブルをやめて振り返り、驚いた様子でこちらを見上げる少年に後悔する。絶対めんどくせえ奴だって思われた。最悪不審者コースかも。

「なんでそっちの方が良いんですか？ この前見たプロの人は、すごい低い姿勢で相手をごぼう抜きしてたからこっちの方が強いと思ったのに」

「確かに強いけど、それはここぞって時に使う技だからね。一人で基礎練するんだったら、もっと姿勢を高く保った方が体力も持つし、いいと思う」

「姿勢って、こうですか？」

「もうちょっと手の動きを意識してみて。うん、そんな感じ」

そう言って、実際に適した姿勢を取って真似しやすくと、少年はすぐに姿勢を改め始めた。ちよつと教えただけなのに、かなり飲み込みがいい。あたしはなんだか無性に嬉しくなって、他の基本動作のコツも教えることにした。先程不審者扱いされるかもと怯えていた気持ちは、思ったより指導に食いつきの良い少年によって霧散してしまった。あたしが教える側からぐんぐん知識を吸収する少年に、久しぶりにバスケへの熱が戻ってきた気がした。それからしばらくして、辺りが薄暗くなってきた頃。あたしははっとした。結局雪が降らなかったからなあなあにしていたが、そろそろ帰らなくては。あと、いい加減この子を帰らせないとまずい。このくらいの背丈だったら小学生だろう、親御さんが心配する前に家に着かせなくては。未だにドリブルを続ける少年に、あたしは慌てて目を合わせた。

「もう暗いし、流石に帰りな。あたしの自己満足に付き合ってくれてありがとね」

「お姉さん、帰るんですか？」

「お姉さんは帰るし、君も帰るんだよ。暗い時に練習しても前見えなくて効率悪いんだから、ねっ？」

明らかに不満げな顔を浮かべる少年に、くだらなく嫌な汗をかく。この子は真っ暗になっても納得するまでここに居そうな嫌な説得感があるからだ。さっき練習した時から、この子に完璧主義のきらいがあるのはなんとなくわかっていた。

どうにか帰らせようと焦るあたしをじっと見つめた少年は、しばらくあたしと目を合わせた後、大きなため息をついた。

「うちのチームのコーチ、全然仕事せずにタバコ吸ってるだけなんです。だから、ちゃんと教えてくれるお姉さんみたいな人が居るうちに練習したいんですけど」

「だめー。練習したい気持ちはわかるけど、危ないからまた別の日に朝来てやりな」

「でも別の日はお姉さん居ないじゃん」

そう口を尖らす少年に、あたしは眉間に皺を寄せた。そして、ちょっとだけ嬉しくなって手を意味もなく擦り合わせる。年甲斐もなく、そう言ってもらえて結構嬉しかった。完全に昔のことを思い出してちよっかいをかけたことが、どうやら二回目を求められるくらいには少年に良いように思ってもらえたらいいから。

「まあ、暇な時ここ来るから。行けたら行くし、たまたま一緒になったらまた見るよ」

「やった！　じゃ、明日の朝十時に集合ってことで！　ばいばーい！」

行けたら行く。結局行動しない大人の常套句が子どもに通じるわけがなかった。笑顔で手を振りながら走っていく少年に、あたしは顔を引き攣らせる。あの子の親御さんにバレたらなんて言おうかな……。

少年と出会ってから、大体半年とちょっとが過ぎた。あたしはバイトの時給が二十円上がったくらいの変化しかないが、少年の変化は大きい。具体的に言うと、少年は中学生になって、少しでも大人になった。そして、少年は一年生で中学バスケット部のレギュラーを勝ち取った。教えているうちになんとなく察していたが、少年はバスケの才能があったのだ。お姉さんの……間違えた、あたしの実力なんてとつくのとうに越されてしまった。そのことがなんだか嬉しくもあるし、寂しくもあるのは大人の性だろうか。

「ねえお姉さん聞ってる？　俺、次の地区予選の話してるんだけど。てかもう最終試合だよ！　俺、お姉さんに一試合目から来てって言ってるのに毎回毎回バイトがあるって来てくれないし」

「聞ってるよ。本当にごめんって。次は行くからさ？」

「また少年って言った！　恥ずかしいからちゃんと名前と呼べよ！」

あーはいはい、とぶんすかする少年を宥める。仲良くなってきた時に教えてもらったが、少年の名前は祐一というらしい。ずっと少年と呼んできたのでついそのまま呼び続けてしま

うが、一応直したいとは思っている。もう癖になっているのであまり改善は見込めないかもしれないが。

あたしはそこまで考えて、大きく伸びをした。出会った時の重苦しい空は、もうすっかり晴れて澄んでいる。今年もまた夏が来たのか。

「じゃあ、あたしはバイト行くけど。熱中症には気をつけて練習しなよ。大会頑張れよ」

「もちろん勝つよ。だから絶対来てよ！」

そう叫んだ少年に手を振って、私はバイトへと向かうため少年へ背を向けた。しばらく歩いた所で少しだけ振り返ると、少年はまだこちらを見つめていた。その視線になんだか居た堪れなくなつて、早足ですぐその角を曲がる。最近、少年の期待というか、真っ直ぐな感情に目を逸らしたくなることが増えた。そして、そのバスケの腕前が上がっていくのも怖く感じるようになった。少年を名前で呼ぶことが少ないのも、あたしのこの気持ちの原因かもしれない。

少年のバスケの実力は本物だ。少年には、バスケの才能も、努力の才能もある。あたしは、その才能を伸ばす手伝いをしてきた……うん、見栄を張った。あたしはただのきっかけにすぎない。芸術家やミュージシャンが信号待ちの間に良いアイデアを思いついたとしても、赤信号に感謝しないように。あたしが少年に声をかけてしまったことが、たまたまいいように働いただけなのだ。あたしはただの大学生で、プロのコーチでもなんでもない。教え方だつて無駄な要素が多いだろうし、その非効率な練習で少年に悪い癖をつけてしまう可能性だつて充分ある。それなのに、あたしは。

「なんで、辞められないんだろう」

少年のためにも、自分のためにも。あの公園へ行くことをやめてしまえばいいのに、なぜか足は毎日公園へと動いていってしまう。そのくせ、少年の晴れ舞台にはどうしても行けない。前日も前々回の試合の日も、実はバイトなんてなかった。少年が負けるのを見たくない、そんな自分勝手な理由で少年の応援に行けなかった。少年が試合のたびに悲しそうな顔をしているのは分かっているのに。どうしても、どうしても。少年が負けるのを見たくない。もう全部言ってしまうば、勝つところも見たくなかった。だって、勝ったところでどうにもならないのだから。田舎の地区予選に勝った所で、頂上は遙か彼方。もっといい選手をもっといい環境で、もっと優れた指導者が指導するチームなんて山ほどある。どうせいつか負けるのだ。あの夏の、インターハイ初戦のように。県大会であれだけの熱量を注いで、誰にも負けないと思っていた、あたしの代でだって全国の舞台であっさりと負けたのだ。あたしはそれから夢もなく、ただバイトと興味もない講義を流し聞きするだけの日々。今あんなに輝いている少年も、いつかは負けて、あたしみたいな量産型の人間になってしまいうだろう。いやだ、全部。少年が今度の試合で負けるのも、勝ち上がった上の大会で負けるのも。いやだ……。

あたしは少年に声をかけてしまったことを後悔しながら、バイト先へ向かった。少年の押しに耐えきれず、次回は試合に行くよなんて言ってしまった自分を恨みながら。

少年の試合当日。あたしは中学生たちの父兄とエネルギーシユな中学生の応援団に肩身が狭くなりながら、試合会場の体育館に着いた。体育館に来るのなんて高校生活ぶりだ。試合会場の熱気に気圧されながらも、あたしは少年の姿を探した。むせかえる汗の匂いに、変に混じって逆に気持ち悪くなる香りになった制汗剤の香り。あの時の光景がフラッシュバックする。どうしよう、もう戻ってしまおうか。でも、少年に来るって言ってしまったし。どうしよう。

「あー！ー！ー！ お姉さん！ やっと来た！ もう試合十分前なんですけど！」

聞き慣れた声に思わず振り返る。出会ってしまった。

「あー。おはよう、少年。マジガンバッテ……」

「挙動不審やばいっす、水飲みます？」

「いや、大丈夫。ただなんか、うーん」

うまく言葉が出てこなくて、手をわきわきと無意味に動かす。実際、現役の時は試合前の応援、なんて言ってたっけ？

「そういう時は、頑張れでいいと思いますけど」

「が、頑張れ」

相変わらず目の焦点が合わないまま、少年へガッツポーズをする。試合前の大事な時間の今、少年に悪影響を与えるわけにはいかない。そう思って無理やり笑顔を作ると、少年はおかしそうに笑った。

「変な顔。ま、俺勝ってくるんで。見ていてください」

少年はそれだけ言って、チームの仲間らしき中学生の所へ戻っていった。お揃いのユニフォームがよく似合っている。あたしはぎりぎりまで待ってくれていた少年に手を振って目で見えながら、観戦スペースへ戻った。地区代表を決める運命の試合は、もうすぐそこだ。

試合終了五分前。先程、高めのシュートにより逆転した点差は未だ覆らないまま試合は進んでいた。あたしはこぶしをぎゅっと握りしめた。

少年のチームは強い。だが、相手チームもここまで勝ち上がっただけあって同じくらい強かった。特に、三年生のキャプテンと思われる高校生並みの体格の子がとんでもなく上手い。少年のチームも頑張っていたが、どうにも攻めきれない様子だ。チャンスはなかなか訪れない。このままでは、きつと……。

「今回もだめかあ。うちの中学、エースの祐一くんが入ってきたけど、基本そんなやる気ないもんね」

「わかる。しかも、相手ってこの前も地区代表だったんでしょ？ 相手が悪すぎるし、無理でしょ」

だんだん少年チームの応援団も諦めモードが漂ってきたのを感じて、あたしは唇を噛んだ。ああ、だめか。だめなのか。あんなに強い少年も、だめなのか。負けてしまうのか。

少年が負ける決定的瞬間を見たくなくて、そっと下を向く。試合時間はもう、残り一分を切ってしまった。逆転は絶望的だ。

少年が負けたら、なんて言おう。どんまい？ それはあまりにも他人行儀すぎる。そもそも少年に指導してるのはあたしなのだから。じゃあ、次頑張ろう？ 次っていつ？ 頑張ろうなんてどの口が言える？

視界が暗くなった。熱気がこもる体育館の中、暑くてしかたないはずなのに背中が冷たくなっていくのを感じる。どんどん時計の針は進んでいく。だめだ、負ける……。

「負けるかあああああ！」

少年の叫びに、はっと顔を上げる。そして、バスケットコートに揺れる視界のピントを合わせた。残り時間三十秒、少年は諦めていなかった。絶望的なまでの状況の中、必死に相手ゴールへとボールを運んでいく。相手チームの、少年より何倍も体格の良い上級生たちを掻い潜りながら、必死にチャンスを作っている。その瞬間、あの夏の試合が脳裏に現れる。動く人影、跳ねるボール、四方八方からの大歓声。あの時のあたしと同じだ。最後の最後まで勝利を目指し続けた、あの夏のあたしと。

「頑張れえええ、祐一いいいいい！」

あたしは、運良く空いていたギャラリーの最前列へ端っこへ駆け寄り、手すりを掴んで叫んだ。そぼの中学生からはぎよっとされたが、構うものか。あたしは手すりをガンガンひつたいて祐一によく聞こえるようにもう一回叫ぶ。

「いっけえええ！」

びっくりしたように目を大きく見開いた少年……祐一は、相手ゴールへと全力で駆けて行った。仲間と協力して、パスを交わしながら、相手ゴールへと着実に距離を縮めていく。そして、ついに。祐一は相手のガードを突破し、思いっきりゴールへとボールをシュートした。狙いは多少ぶれたが、勢いは申し分ない威力のシュート。ゴールには当たるだろう。問題は、ボールが跳ね飛ばされないか、それだけだ。あたしはそのシュートの先を、目玉が落ちてしまいくらい凝視した。あまりの緊張に、自然と息が止まる。残り時間は後十秒もない。ああ、ボールがリングの上を廻る。一回、二回、三回……。

あたしのバスケの熱は、一度冷めてしまった。インターハイ初戦、惨敗という結果で。どれだけ頑張っても技術を磨いても、いつか負ける。頂上へは届かない。高すぎる壁に、諦めてしまっていた。

でも。

ゆっくり、ゆっくりと軌跡を刻みつけるように、ボールがゴールの中へ落下する。その瞬間鳴り響く試合終了のホイッスルに、体育館が揺れるほどの大歓声が湧き上がった。勝ったのだ。最後の最後に逆転して、祐一が勝ったのだ。コートの中でもみくちゃにされている祐一を力の抜けた身体で見つめながら、あたしはふっと笑った。

この後、片付けが終わったら。祐一に全部言おう。まず、あたしの名前が理奈だってこと。少年に、少年とバスケットを見つめるのが怖くて、少年のことをまっすぐ見れなかったこと。そして、

あたしの熱を、バスケットへの情熱を代わりに取り戻してくれて、ありがとうってこと。

めざとくあたしを見つけた祐一がこちらへこぶしを突き上げるのを眺めながら、あたしは笑顔でピースを作った。ココアが売ってある自販機は、近くにあっただろうかと考えながら。